

第IV部門 京都における名水の性格に関する研究

京都大学工学部 学生員 ○松下 倫子
 京都大学大学院工学研究科 正会員 樋口 忠彦
 京都大学大学院工学研究科 正会員 川崎 雅史
 京都大学大学院工学研究科 正会員 出村 嘉史

1. はじめに

京都に住む人々の営みを支えた要因のひとつとして、近年、豊富な地下水の存在が注目されるようになってきている。上水道が整備される以前、京都の井戸水・湧水は、水を得るための重要なインフラストラクチャーであった。

また京都の歴史上には、この井戸水・湧水に関わる様々な文化が発達した。「名水」と呼ばれる水もその一つである。京都を題材とした江戸時代成立の各地誌に登場する水は、インフラストラクチャーとしての井戸は殆どなく、大抵がこの名水であり、名水が他の水と区別して扱われていたことが伺える。このことから、名水の周りには、一般の井戸にはない特別な空間が多く整えられていたと思われる。

本研究では、水と都市との関わり方を明らかにするために、京都に数多く存在した「名水」と呼ばれた水の性格について、歴史的な資料を用いて分析した。

2. 名水の定義、分析方法

「名水」とは「名のある水」のことで、名をつけられた湧水全般を指す。よってその性格を一元的に考えるのは妥当ではない。しかし裏を返せば、名が与えられていたということは人々に特別なものとして認識されていたことに他ならない。

本研究では『京都民俗志』¹⁾と『京の名水』²⁾に集められた「名水」に関する情報を基本とし、それにその他各史料から得られた情報を足して分析する、という方法をとっている。

3. 名水の性格の分類

本研究で対象とした名水の分布を、図1に示す。このように、数多くの名水が存在していたことがわかる。

そして分析の結果、名水の性格を大きく3つに分類



図1 研究対象とした名水の分布

(1) 物質としての水を利用するもの

この性格に分類される名水は、その水質の良さから飲用・茶の湯・産業などに利用されたり、更に苑池の水に使われたりしていた。

図2は、都七名水に数えられた芹根水と左女牛井で、



図2 芹根水(左)と左女牛井(右) (『都名所図会』より)

双方とも、茶の湯にも用いられた清泉である。芹根水は堀川の中、月見の名所として知られた木津屋橋のもとに湧出しており、利用者のために設けられたと思われる階段も描かれている。左女牛井は、平安時代からその名を知られた名水で、都名所図会に描かれた頃には、用いる人もなく、井筒が埋もれてしまうほどさびれていた³⁾が、見物人のために設けられたと思われる柵や欄も描かれており、名所となっていた様

子が伺われる。

また、図3は都林泉名勝図会に描かれた東寺の山吹の庭の様子である⁴⁾。この庭にある池には、のちに山吹

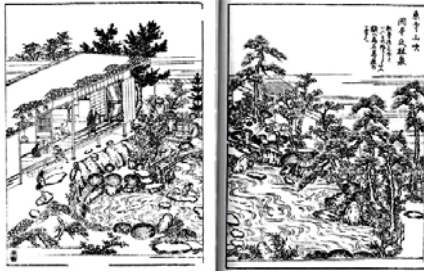


図3 東寺山吹の庭 (都林泉名勝図会より)

の井と呼ばれる名水の水が使われていた。

(2) 水の呪術的効果を目的とするもの

かつては、水に霊力や神秘力があると信じられていた。中でも地中から湧き出す水には、特別な力の存在を感じていたようである。

よってこの性格に分類される水は、神社や寺などへの信仰や祭などと深く結びついており、神社や寺の移転に伴って名水が移転することもあった。つまり、水そのものの質にはあまり関心がないため、たとえ水が枯れて出なくなったとしても、その神秘力に対する信仰から井戸枠などの形跡を保存している場合も多い。

このような名水のひとつに、祇園祭の手洗水がある。この水は図4のように『都名所図会』にも描かれており、祇園祭の期

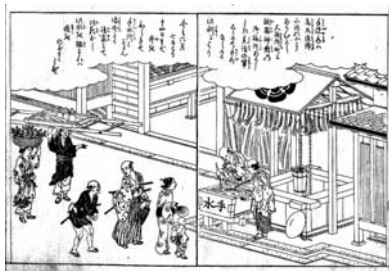


図4 手洗水 (都名所図会より)

間中のみ一般に開かれていた。これは水のもつ「穢れを洗い清める力」を重視した水で、祇園祭の際には人々がこの水で手を清めたという。また、この水を服すれば疫病にかからないという信仰もあった。

都名所図会に描かれた手洗水は、私有地にありながらも通に面して立地しており、公共物として利用されていた様子が伺える。

(3) 水の本質とは関係のないもの

この性格に分類される名水は、歴史や伝説を語る記念碑としての性格が強く、もはや水のあるなしはさほど関係がなくなっている。同名のものが複数存在することもあり、また同じ伝説や言われを持つものが複数存在するのも特徴的である。

4. 時代とともに変遷する名水の性格

3. で挙げた3つの性格については、一つの名水が同

時に複数の性格を持ち合わせている事例も多い。そして同じように湧いている名水でも、時代とともに性格が変遷することがある。

かつて神泉苑中に存在した神泉と呼ばれる名水は、当時の広大な苑池の水源となっていた。この神泉苑は当初禁園として利用され、貴族の遊宴の地となっていたが(図5参照)、その後宗教的性格を帯びようになり、雨乞い祈禱の場として重要な場となった⁵⁾。



図5 神泉苑での宴の様子 (都林泉名勝図会より)

5. 結論

京都の名水に (1) 物質としての水を利用するもの

は様々な性格のものがあり、それは単に「水を得るための場」というものにとどまらない(図参照)。人々は井戸水や湧水を通して、歴史や伝説、神など、様々なものを見ていたのである。

そしてそれらの性格をよりはっきりと具現化するために、名水の周辺は、それぞれの形に環境を整えられてきたといえる。

以上のようなことから、京都においては、井戸水・湧水が作り出す環境が、多様な意味合いで人々に受け止められていたことがわかる。豊かな水環境の整備の実現には、このような水の多元性を理解することが重要であると思われる。

以上のようなことから、京都においては、井戸水・湧水が作り出す環境が、多様な意味合いで人々に受け止められていたことがわかる。豊かな水環境の整備の実現には、このような水の多元性を理解することが重要であると思われる。

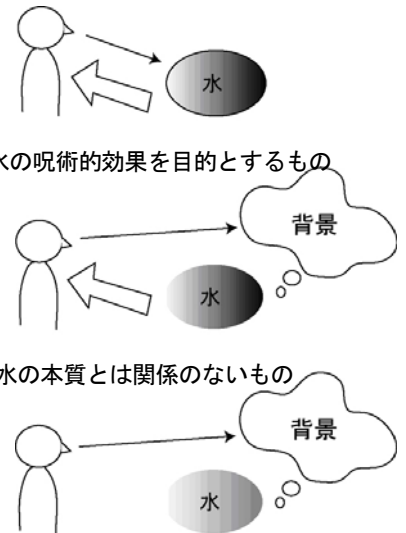


図 名水と人の関わり方の分類

参考文献

- 1) 井上頼寿著『京都民俗志』, 松田尚友堂, 1933
- 2) 田中緑紅著『京の名水』, 京を語る会, 1960
- 3) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第六巻 都名所図会』p.172, 臨川書店, 1995
- 4) 秋里籬島『都林泉名勝図会 (上)』pp.138-139, 講談社, 1999.12
- 5) 村山修一著『平安京; 公家貴族の生活と文化』, 至文堂, 1966.11